

特集 英雄なきあとの中国の憂鬱

対談

毛沢東神話は瓦解するか

毛沢東の死は中国社会の流動化を促すか、ポスト毛体制は毛路線を継承できるのか、多角的に検討する

桑原 壽二

(総合研究所中国部長)

中嶋 嶺雄

(東京外国語大学助教授)

ポスト「毛沢東」は誰か

中嶋 毛沢東の死は、私自身、大変時期が悪いという印象を持っています。今年にはいってからも相次いだ政治的激動——言うまでもなく周恩来の死、「走資派」批判、鄧小平失脚、天安門事件、朱徳の死、そして河北大地震——に続いて最後の訪れた感じがします。

それだけに、毛沢東の死そのものはかなり予告されていた

て、それなりの準備があったのかもしれないけれども、死後にどう対応するかという準備までは、とてもなかったような状況の中で、毛沢東は天寿を全うしたということではないか。

とくに、中国は七月二十八日に起った河北大地震の衝撃から抜け切れていなかった。この大地震は単に自然的な意味での災害ということのみならず、もっと政治的、あるいは心理的な動揺が多かったわけで、「人が天に勝つ(人定勝天)」

という毛沢東型社会主義建設が持っていた思わぬ陥穽を中国民衆に気付かせた。民衆の間には、そういう気持が非常に募りつつあった時に、再び、予告された地震ではなくて、今度は毛沢東の死が訪れたということだと思ふ。

周恩来がかつて、国際情勢を「天下大乱」とたとえて言った時に、有名な七言絶句の中から、
やんぬるかな花の落ち去るを、
山雨まさに来たらんと欲して風楼に満つ

という詩を引用していましたが、私もいまの中国はまさにそういう感じだと思ふ。

桑原 河北大地震で、いろんな流言飛語が出ている時に、毛沢東が死んだというのは、中国の政治風土からいって、将来に尾を引くことになると思います。迷信を迷信でなく受け

つける政治風土があるということは、将来の政治的な史実になるし、一つの政治思想として発展する可能性もある。これは大きいと思います。
さて、私は毛沢東の訃報を聞いて、まず毛沢東に遺書があるのか、ないのかという問題に興味を抱きました。孫文は「革命いまだならず」の有名な遺訓を残しているし、蔣介石も格調高い遺囑というものを残して死んでいる。当然、中国の従来のパターンから考えれば、毛沢東の遺囑というものがあるはずですが、いまの段階ではまだ発表されていない。

それで、仮に遺囑がない場合を仮定して、私はいろいろ想像をめぐらしてみただけです。その場合、天安門事件直後、陣営を立て直した時、毛沢東の提案によって、華国鋒を党第

一副主席兼國務総理にする、鄧小平を解任するということを決めている。この華国鋒同志につけられた党第一副主席の「第一」という、ナンバーリング

は慣例としてこれまで付けていないわけですが、発表順によって、われわれは「第一」「第二」と勝手に推測するの

と付けたのかという点にあります。それは、私の想像では、「第一」と

毛沢東神話は瓦解するか



桑原 壽二 氏



中嶋 嶺雄 氏

いう二文字の中に最終的に華国鋒を後継者として起用した毛沢東の強烈な意思表示と願望がこめられているように思うのです。従って、もし遺言がなかった場合、毛沢東の最後の意思表示として、「第一」の二文字が一種の遺書的なものになるんじゃないか。

華国鋒の調整能力を買った毛沢東

桑原　そこでなに故に最終的に華国鋒を後継者にしたかという問題が出てくる。毛沢東の絶対的な条件というのは、文革の徹底化、つまり自分の思想と路線の継承ということにあるわけです。華国鋒はもちろん文革の試練を経て、起用されたわけで、そこで彼の思想的立場は明確化されている。

次に、毛沢東は、自分の死んだ後に一種の政治的な空白がきて、当然集団指導に移行するであろうということを読んでいたと思う。「集団指導体制」——これは言うは易く、これほど行なうのにむつかしいものはないと思う。有能な調整者がいないと集団指導というものは、どちらかに偏向して、破壊と分裂の場になる。そこで、現在の集団指導体制の中で、調整能力を持っている人間として、毛沢東は華国鋒を起用したと思うのです。つまり、毛沢東派と劉少奇派の鋭い対立をした湖南省をとまかく大連合させた華国鋒の手腕と実績を買った。

また、林彪事件の善後処理の責任者として、軍内最大の派

閥勢力のある林彪に対するみごとな裁き方で、危機一発のところをうまく処理している。あるいは、昨年の全国農業会議で、鄧小平と江青が真っ向から対立したと思われるが、この対立を華国鋒はうまく統括して、しのいで来た。

こういう華国鋒の調整能力を毛沢東は高く評価した。しかも華国鋒はまだ新参者であるだけに、毛沢東は特に「第一」というナンバーリングを与えて、俺の気持はここにある、お前たちは華国鋒をバックアップしなくちゃいけない、という熱い意思がこめられていると思う。

こういった私の仮定がもし当てはまるとして、その毛沢東の意思が尊重されるとなると、毛沢東の死の興奮がさめるまでの時期というのは、華国鋒体制で行くと思う。ただ、その体制で、先ほど中嶋さんがおっしゃった天下大乱の状況をしのげるかどうかという非常に大きな問題が出て来ている。しかし、自分は華国鋒体制で行くことになるだろうし、そこに毛沢東の意思があったんではないかと私は見えています。

中嶋　私も遺書の問題というのは、一番大事な問題だと感じていました。ただ、どうなんでしょう。ご指摘のように中国人の今までの慣習からすると、遺書を書いていると見られるけれども、もし毛沢東がエドガ・スノーに語ったような、ある種のすべてを達観したような境地が本当のものであるとすれば、あるいは遺書を書いてないかもしれない。毛沢東の個性からすると、その方が相応しいような気もするんで

す。

ただ、状況は遺書が必要とするような政治の流動化と不安定があるだけに、遺書があるんじゃないかという気もします。この辺はまだまだわからない。

もし仮に遺書がなくても、いま桑原さんが述べられたように、「第一」という二文字が毛沢東の意思だということは、私もその通りだと思えます。

集団指導体制は果たして可能か

中嶋　そうすると、どうしてもある種の集団指導体制でいかにざるを得ないわけですが、社会主義国家において権力が集団指導体制によって、安定ないし持続した例はないということがまずあげられます。この点はスターリン死後、フルシチョフ失脚後のソ連の例からも明らかです。

第二に、あの中国の政治的風土といましようか、ポリテイカル・カルチャー（政治文化）が集団指導という、ある意味で近代的な統治システムを受け付けないと思うのです。同時に、歴史の前例からすれば、独裁的指導者を欠いたあとと中国は、長期の混乱を続けている。中国という国を統一して行くには、なんらかのシンボルが必要であるということからしても、集団指導体制と一口に言っても、非常に厳しいものであると思えます。ですから華国鋒がもし出てくれば、ある意味でブレジネフと同じように、その時はそれほど大きい存

在だと思われなかったけれども、かなりの地位を築いていくという気がしないでもない。

ただそこで華国鋒による集団指導体制でいった場合の問題は、今日の中国というのは、七五年一月の全国人民代表大会が採択した新憲法と、それから七三年八月の一〇全大会の党規約によって、ともかく党主席に「すべての権限が集中」するようになってきているということです。国家機関さえも党の指導の中にはいってしまうし、軍もその中にはいってしまう。

「党の一元化指導」の原則に基づいて、党主席に権限が集中するように、法制的には形成されている。つまり、いってみれば党主席がすべてを統括するような、強権化されたシステムが作られている。その権力構造は、考えてみれば、毛沢東だから許容され得たことであって、他の人にそれだけの権力の集中を許すかどうか、すなわち華国鋒に対しても許容され得るかという問題が、現在の状況を考えると直ぐ出てくると思うのです。

もっと具体的なことを考えると、恐らく十月一日の国慶節までに、後継体制を固めて党主席を選任したいと思っただけでしょうが、仮にその場合、華国鋒が党主席に選出されたとする。また、この華国鋒は——最近國務院の首相として、特に河北地震の救援活動に活躍して、行政面での手腕も発揮し始めている。——恐らく國務院総理の方も兼ねるのではないかという気がする。そうすると、華国鋒は党主席兼國務院

総理という、毛沢東も周恩来も任じたことのない前例のない地位を占めることになるわけです。

こうした圧倒的な地位が華国鋒に与えられるということには、華国鋒が毛沢東に比べて重量感に乏しいからそういう地位的保証を与えて、毛沢東路線を継承させるという見方もできると思っています。それは状況が安定していればそれでいいけれども、それほど権力を華国鋒に集中するかどうかという問題が一方にある。

そうすると、毛沢東のみに許容した強権を新しい党主席にも制度的に保証することには、かなりの抵抗を覚えることになる。そこに、いずれ現行の一〇全体制ないしは第四期全人代体制を崩そうとしていく力が働いてくる。それに対して、一度地位に就いた華国鋒——仮に華国鋒が就けば——としては、その地位を絶対分離そうとしないで、現行の権力システムの維持をはかろうとするのは当然だと思ふ。その点で現行の権力システムそのものが、非常に激しい党内の政治的緊張をもたらさざるを得ない問題性をすでに作ってしまった。つまり、それは毛沢東体制の中にそういうものができちゃってしまっているという現実があると思ふのです。

華国鋒の双肩にかかる中国

桑原 毛沢東の死は、党主席としての毛沢東の権限が、第一副主席の華国鋒にのしかかってくるということを意味す

を整えたいというのがこの時点での中国の考え方じゃないでしょうか。

中嶋 この雑誌が出るのは十月上旬ということですから余り予測をしない方がよいかもしれませんが、まだ中国の指導者自身が整理がつかないのじゃないかという気がするんです。

たとえばもしも天安門事件なかりせば、桑原さんのおっしゃったことは私ももっと見通せるような気がするのですけれども、天安門事件はやっぱり今後の中国を治める上で、非常に大きく考えざるを得ないものを残した。あれは明らかに毛沢東政治なり、毛沢東側近体制に対するあからさまな批判であつたわけです。その意味では、現在の中国の内部には、毛沢東の死を悲しむと同時に、いわば「解放された死」というような側面、この死によって政治を流動化させようといっ

る。しかし、まず党の最高責任者として、うるさ型の揃っている政治局を運用しなくてはならない。次には軍の統帥者として、三百万の軍を統括しなくてはならないし、その上で八億人を擁する国家を、首相の立場で管理しなくてはならないわけです。

これが華国鋒の双肩に、毛沢東とか周恩来とかいう媒介者なしに重くのしかかってくるということは、大変大きな問題で、中嶋さんがおっしゃるように、そこから数多くの問題が出てくることは、ほとんど必然的だろうと思ふ。そういう意味で天下大乱の含み状態にあるということは指摘してもいい。

ただ、毛沢東が死んだということで、その余韻というか死の興奮といったものがまだ続く間は、それぞれの自己利益のために、何とか華国鋒を盛り立てようという空気が出てくるかもしれない。しかしもし党主席をも華国鋒に与えようとすると、彼の指導性、指導力から推察して、やはり権力の分散化などという処理状態が出てくると思ふ。事を穏便にすまそうとするならば、国家主席ではありませぬけれども、国家主席的なものと党主席との分離措置が、次善の策というような意味合いでとられるんじゃないか。

党主席は一体だれになるか、首相は一体だれになるだろうか、そして全国人民代表大会の常務委員長はだれかは興味をひくところですが、十一月一日の国慶節までに、一応の体制

た潮流、言葉は悪いけれど、ある意味では「その死を待っていた」という雰囲気がかかりあるはずだ。社会潮流を変えようという動きがすでに天安門事件にはあつたし、あるいは昨年夏の抗州事件にもあつたわけだが、これは単に政治的な確執から生まれたということだけではないと思ふ。周恩来が提起していわゆる「四つの現代化（工業、農業、国防、科学技術の現代化）」という路線が、当面の中国には必要とされるといった、いわゆる社会の発展段階からの必要性もあって、これが社会的な成熟を遂げていたような気がする。だからこそ走資派は強かったわけです。またそうであるが故に、鄧小平個人が失脚したにもかかわらず、最近の力点としては、「批鄧運動」を徹底的にやらなければいけないということになつている。

それから地震の頻発などから、いわば「天のお告げ」とい

こんなに便利！

必要に応じてお使いいただけます。

- 留守中の電話におこたえします
- 通話をそっくりメモします
- ご注文・ご用件をうけたまわります
- だれからの電話かを確かめられます
- かかった電話を録音 出先へ中継します
- お知らせ・ご案内をくり返します



価格65,000円 (工事費・申請費別)

NEC 留守番電話装置
メッセーヂホン

日本電気・新日本電気
お問合せは
日本電気株式会社 住宅内機器事業部 営業部へ
TEL(03)453-5511(大代)
新日本電気株式会社 営業本部 情報機器課へ
TEL(03)434-3211(大代)

うような感じの宿命論的な気持ちになっているとすれば、毛沢東の死というものに対して、もう一つ違った世界を待望したいという潮流が、すでに明らかに中国社会に出ていたと見なければいけないわけです。そういうことになる、私は華国鋒はコーデイナー（調整者）だと思いますし、今後ますます彼の調整能力を必要とする事態が現出するだろう。にもかかわらず少なくとも文革派に対する批判が背景にあるだけに、華国鋒批判が一時に爆発しないかという不安は残る。

桑原 日本のジャーナリズム一般は、文革派対実務派の人間対立を取り上げているが、私はそれ以前の問題として、またより大きな問題として、社会の潜在動向というものを重視したい。

というのは、天安門事件は毛沢東よりも周恩来の方がベターだという大衆の選択ではありませんでしたが、それはあくまでも現在の体制に対する反対手段として周恩来をもつて来たわけです。その場合、やはり潜在的に、性急に解きほぐされたいという一つの自由の要望的なものがあつたんじゃないか。

英雄なきあとの中国の混乱

桑原 私が非常に重要視するのは、広東に出た三万字に及ぶ哲学論文的な、「李一鉄の壁新聞」です。李一鉄という知識青年を代表した不特定多数のペンネームの哲学的、政治的な大論文は一言で言えば、「法治下における自由の擁護」だと

ったと思う。要するにそれは現在の無法なる個人主義の独裁、統制に対する大反対だったわけで、これは一つの潜在動向として非常に大きいものがこめられていると思います。さらには、抗州事件とか、天安門事件での一種の市民参加型の反体制運動というものの文脈の中に、やはり大きな社会的な動向があると思う。

あれほどカリスマ的権威をもった毛沢東の在命中でさえもこのような事件が起つたということは、毛沢東亡き後には大変大きなインパクトを与えるだろうし、あるいはある機会に爆発するかも知れないという極めて危険な状態に今の中国社会はあると言える。

中嶋 今のところ見通すのはむづかしいと思う。ですから桑原さんがおっしゃったような可能性が非常に社会的な現実としては強いけれど、政治的な現実としては、当面華国鋒体制がコントロールしていく可能性は、無視できないような気はするんですが、その辺の見通しがいまの段階では非常にむづかしいですね。

ですからもうちょっと時間をかけて見なければいけないんですけれども、今後の中国を見る場合、単に党内闘争という問題だけでなく、中国社会そのものが大きな転換期にきているということは言えるでしょう。ですからある意味では抗州事件というのは、将来の中国にとっては、林彪事件よりも重要です、天安門事件はさらにまた重要だということになり

ます。

それから、かつてスターリンが死んだ時に、ソ連社会の中に育っていたような、ある種の新しい利益集団、つまり官僚であるとか、技術者、テクノクラートですね、それからインテリ、熟練労働者といったものの登場に注目する必要があると思います。一連の抗州事件の時の工場労働者、それからついこの間の「人民日報」にも書いてありましたが、天安門事件の時に参加した下放知識青年とか科学院のインテリ、それから国務院の中にいる官僚層などは、ソ連のそれと何か非常によく似ているような気がします。こういうグループはやはり毛沢東独裁体制というものを、もう時代遅れだ、つまり秦始皇帝の時代は終わった、という言葉が非常に象徴的だと思う。

そうするとやはりその辺を注目していく必要があると言えようような気がします。

桑原 むしろこれからの一番大きな問題でしょうね。

内部抗争は激化するか

中嶋 ですからそれに華国鋒体制というものが果して耐え得るかどうかが、今後の華国鋒体制を見る一つの眼目になると思う。その場合に問題になるのは、さっきの毛沢東の遺書、遺囑という問題も含めて、文革派というまぎれもない一つの家父長体制、一種の派閥を上海グループとして作って来たことだと思ふ。

考えてみると上海グループは、江青夫人が中心として作り上げて来たことはまぎれもないことで、姚文元、王洪文、張春橋等がその江青サロンから出ている。上海グループがイコイル文革派と言われるけれど、実は文革派は上海グループだけではない。毛沢東の長年の秘書であつた陳伯達、それから軍でそれをバックアップした林彪、それに華国鋒や汪東興も入れてもいいかもしれませんけれど、そういうものが実は一緒になつて文革派を作つたんです。しかし、周知のようにその文革派の中から肝心の陳伯達や林彪がはじき出されてしまつた。そして結局、ある意味で毛沢東一家だけが残つたようになつていますが、この問題が一つあるような気がします。つまり、今の中国には、そういう毛沢東一家というか、毛沢東家父長体制に対する批判が、非常に強い。

もう一つは、それにまさしく対置するような形である種の閥族（オリエンタル・メプテイズム）といわれるようなものがあるのは、湖北省出身の軍人たちですね。中国の県は日本の郡ぐらいの大きさであるにもかかわらず、あの広大な社会の中で今の後継軍人の中の主なグループを見てみると、黄安県出身の人が非常に多い。たとえば一番重要な北京軍司令の陳錫聯、広州軍区の許世友、瀋陽軍区の李徳生、それから実務派で周恩来系統だと言われる李先念などが黄安県の出身者です。

こういう問題を考えると、やっぱり今後の中国はまだ

いわゆるそういうタイプの政治の動きも無視できない。私はその両方から今後は何か出てくるような気がします。軍の中も、いわゆる第二野戦軍系統だという言葉だけじゃなくて、劉伯承系統とか、それから周恩来系統とも言われるものもあるんですが、それプラス黄安県につながるような一種の地縁集団——上海グループと同じようなもの——があるわけで、これは本当に驚くべきことだと思っております。

桑原 それは大きな問題ですね。

中嶋 中国社会の要請としては、今までの毛沢東家長体制と違った政治システムを要求しており、しかも社会的にはそういう層——ある意味ではそれは周恩来型の政治を支持する人々と言ってもいいと思う——がもう出て来ているにもかかわらず、一方に毛沢東家長体制の政治の現実がある。やはり、その辺が今後の内部抗争の展開の際に一つの大きな見どころになるんじゃないでしょうか、桑原さんいかがでしょう。

一元化指導体制では反発が……

桑原 「内部抗争はどう展開するか」ということについて、一般のどの新聞解説でも一番の重点は、やはり軍がどう動くかということがポイントになっていた。すなわち、軍を握った人間がやっぱりイニシアティブを取るだろうというのがおおむねの結論でした。

出て来るのは地方の割拠的な動きが出てくるだろう。

要するに文革派が軍を統制しようとする猛烈な反発を起す。従ってゆるやかな統制しかできない。もっとも毛沢東が生きているにしても軍を十分統制しきれなかった。しかも毛沢東が死去した今日では、軍に対して党が一元的指導などで統制をすると、必ず猛烈な反発が出てくるだろう。従ってゆるやかなる統制というか、軍の半独立的なものの許容の上で立って統括する以外に私は方法はないと思います。

そこで私は、とりわけいま中嶋さんの指摘した同郷意識、いわゆる中国人特有の強烈な同郷意識でつらなっている黄安グループは、従来の派閥を超越して相互連携をとる可能性があるかと考えるわけです。この辺がどうも実力集団というか、無視し得ない一つの大きな存在になるように思う。

中嶋 もしそういうことになると、どちらかというところから文革派ではなくて、少なくとも華国鋒から右ということになるような気がします。

ですからその点で華国鋒はなおさら文革派とは違った動きを強くしなければいけないだろうし、場合によると張春橋がそこにはいってくるんじゃないかという気もする。それから私は、呉徳に割合注目しているけれど、呉徳が華国鋒体制にかなり寄与しているような気もする。

最近もう一つ気がつくことは、「ニューズウィーク」も書いているように、銀行強盗があるとか、地震前後だいが中国

中嶋さんが今指摘した黄安グループというこの実力集団は、私は大変注目していますが、それはそれとして、現在の軍を総括的に握っている人間がだれかいるのか。朱徳の死はその意味において非常に大きい。要するに人民解放軍を総括的に握っている人間は一人もいない。

また、私は日本で知られている大物の各地方軍区の司令官が、管下の自己の命令下にある各部隊を果して現在統括しているかどうかということについても非常に疑問を覚えます。というのは、文革以来十年経っておるが、この十年の間内に、やはり兵隊そのものの性質が相当変っている。また下級将校、下級幹部、あるいは中堅を含めての幹部が、相当文革エリート的な人間で占められている。そして、毛沢東の死ぬ以前の比較的新しい「人民日報」を見ると、軍内部において一種の下剋上のものができてきている。

そのような軍の状態を見て、鄧小平はいわゆる軍の整頓という問題を提起した。要するに中隊に下放して来た将軍を指して、「李さん」という呼び方を下部の兵隊がするのにもみられるように、幹部がまるっきり兵隊から孤立している。これは軍は戦えないということで、軍の整頓を要求した。

このように現在の中国では軍全体を統括しうる統帥者はいない。しからばこの大軍区中心に將軍連がうまくこれを把握しているかという、極めて疑わしい。従って軍が一つの集団に本当になれるとは私には考えられない。やはりせいぜいの治安が乱れている。「人民日報」も八月下旬以降は非常に治安の乱れを指摘している。この問題はなんなのでしょう。桑原 やはり反毛沢東的な内部抗争の気分は強い。と言うのも、毛沢東体制によって利益を受けた集団があり、これがやはり文革派の現実的な権力の基盤になっていると思う。

それに反して、毛沢東体制から落ちこぼれた社会勢力、これは紅衛兵の中にも、あるいは若い世代の層の中にもある。また、一生涯を中共革命とともに進んで来たいわゆる実権派の中にもある。そこで私は、いわゆる毛沢東体制から落ちこぼれた、あるいは疎外された勢力と、その体制によって利益を受けた集団との猛烈な対立抗争があると思う。

しかし現在でもなまじっか文革派が、そのような利益集団を握り、かつまた権力の武装化をやっているがために、私は今後内部抗争が起れば、非常に大きな、凄絶な混乱になるというふうに見えています。

毛沢東批判の根強い潮流

中嶋 その場合に、毛沢東批判というものが、かつてのスターリン批判のような形で中国で起るかどうかという問題があると思う。

この予測も非常にむづかしいけれど、こういうことが考えられると思う。一つは、すでに毛沢東批判というものは明示的にも暗示的にも存在してきたという考えです。確かに中共

建国以来、多くの指導者たち、たとえば彭徳懷、劉少奇、あるいは鄧小平等の党内闘争の敗北者はいずれも毛沢東批判者であったと言える。それから天安門事件にしても、今度の走資派の動きにしても、ある意味では毛沢東政治への批判の潮流が広範に潜在していることを明示している。これは、スターリン存命中の状況とは全く違うだけに、青天の霹靂のような毛沢東批判は必要ないという論理が考えられる。ですから私は、徐々に毛沢東神話が崩れて、毛沢東の立場がもっと歴史の文脈の中で相対的に位置付けられていくだろうと思うのです。

もう一つは、それについても不安があるのは、ある意味で毛沢東の死を待望していた雰囲気为中国社会に根強く存在していた。それだけに今回の「訃告」の中で、毛沢東がいかに偉大な指導者であったかを讃えているが、毛沢東のいわば対立者として、陳独秀から始まって鄧小平に至るまでの十二名を挙げている。しかもこれらの人達はそれぞれの時代を築いたリーダーの一人であって、逆に言えば、毛沢東はこれだけの人を過去に敵に回して来ている。つまり、毛沢東一人が天寿を全うし、主席として政治の最後を全うしたが故に、これだけの人たちを打倒して来ているということは、毛沢東政治は、実に無理の多い政治であったということなのです。

そのために、ある種の怨恨を含めた、さつき桑原さんがおっしゃった言葉を中国語で「算帳」(勘定を清算する)という

しかしそれが、竿頭一步進んで毛沢東批判にまで及ぶかどうか。要するに毛沢東批判ということになると、毛沢東を歴史から抹殺することになる。たとえばスターリンがそうであったように、フルシチョフが出て来て、スターリンを断罪したように、毛沢東批判に踏み切ることが出来るかどうかは大きな問題だ。おそらく、死ぬ瞬間に毛沢東が最も恐れたのはこのことだろうと思う。

しかし、ここでスターリンと基本的に違う毛沢東というものを、毛沢東の弁解論として展開してみたい。(笑)

毛沢東はあらゆる意味で失敗したと私は思うけれど、二つだけ大成功を収めている。一つは阿片戦争以来、あの誇り高い民族が百年以上にわたって諸外国から屈辱を受けた。それを毛沢東が見事にそそいだという「民族的な功績」です。このことは没すべからざるもの、歴史家が抹殺できない毛沢東の功績だと思ふのです。

第二に、毛沢東は、強烈なナショナリズム、民族主義といえますか、を形成したということに、私は成功したと思うのです。この二点を毛沢東のプラス面として評価しておきたい。

そこで、非毛沢東化政策は確かに展開されるけれども、スターリンのように批判されるかどうか、その民族的な功績はその過ちを補って余りあるかどうかは、これはもうわれわれ部外者が、立ち入るところではない。これは民族の決定するところで、もしある人々が予想しているように、鄧小平が復

けれど、走資派などは盛んに算帳と言っている。そういうところからすると、「一挙に、かたをつける」という状況が生まれにくいとも限らない。

天安門事件の騒動は毛沢東側近のところまで行って抑えられたけれど、今度は毛沢東がいけないだけに、もっと爆発して、毛沢東そのものの革命的功績は認めるにせよ、毛沢東政治に対する批判が起ってくる可能性はある。たとえば林彪事件にしても、あの時の責任は毛沢東にあったのではないか、林彪事件の真相はもっとはっきり追及されるべきだということ形です。

さっきの「李一鉄論文」もそうですし、いくつかの下放知識青年の間にも、かつてソ連の若いインテリの中にフルシチョフの秘密報告を明らかにして、自分たちに知らせると言ったと同じように、毛沢東の多くの政治の無理から起ったいくつかの謎が残っているけれど、それを一挙に解明しようという動きが出てこないとも限らない。

「非毛沢東化政策」は進行する

桑原 要するに毛沢東とスターリンの対比の問題になる。しかし、私は「非毛沢東化政策」は必然的に展開されると思う。これは毛沢東のカリスマが落ちた今日において、文革派の急進化政策はとも持続し得ないし、その力もない。従って、「非毛沢東化政策」はほとんど確実にとられるだろう。

活するような事態が出て来た場合には、鄧小平は、フルシチョフになると思うのです。

中嶋 その可能性も全然ないとは言えないですね。この一、二年の間に、いろいろな中国の変化の中で、彼の再々登場ということもあり得るかも知れない。それは、すでに抗州事件や天安門事件に現われたような、社会を変化させなければならぬという新たな受益者集団が、今後どういうように成熟していくかということにかかっている。

「四つの現代化」をめぐる権力闘争

中嶋 そこで少し気になるのは、この「訃告」の中には、例の「四つの現代化」が、ほとんど触れられていないということです。これは表向き考えると、天安門事件の時にも、いわゆる反革命分子として断罪された人達は「四つの現代化」を詩にまで書いただけに、これを否定することは無理もないと思うのです。

が、その実、この「四つの現代化」路線は、周恩来が全人代で提起し、そこで承認を得た中国の基本的な国内建設の方針であるわけです。

しかも、この「四つの現代化」それ自体は、実は毛主席が提案し決めたものだ、その後「人民日報」などでは盛んに言っているのですから、当然、「訃告」の中で触れるべきことなのに、全然出ていない。それを私は奇異に感じたのです。

このことはもしかすると、実は今後の毛沢東以後の時代において、「四つの現代化」が基本的な課題であるが故に、そのことを意識的に「訃告」では避けたのだらうと思うのです。

そうすると、「四つの現代化」という路線が今後表に出て来ることになる、中国社会はそちらの方向に向って変化していくという気がする。

桑原 少し話はそれるけれど、華国鋒はマレンコフ（五三年スターリン死後首相、五七年に追放される）にはならないという見方がある。なぜなら彼は公安ボーイである。そこで中国の政治の特殊な性質として、特務の組織を握ったものが絶対に天下をとることは確実です。

そこでポイントとは、真の意味の特務を握っている汪東興がどれだけ華国鋒に援助するか、軍内の特務を握っている張春橋がどれだけ彼と提携していくのか、これが問題のポイントだということです。

ただ、いま中島さんのご指摘の通り、「訃告」というのはこれはある意味で毛沢東の遺囑ではないかと思うのです。毛沢東以後、毛沢東路線、あるいは毛沢東思想の解釈をめぐる、果てしない論争が出てくると見ています。

そこで、「訃告」は——これはある人から示唆を受けてフツと気付いたのですが——毛沢東思想及び路線の解釈の幅を示したのではないかという気がするのです。ですから、そこに「四つの現代化」がないということは、非常に大きな

問題を提起していると思う。それは、文革派路線を強行して行くという意思表示であるかもしれない。

中嶋 ですから逆に言うと、この「訃告」に「四つの現代化」がないということは、「四つの現代化」を待ち望む声が大きな潮流として潜在しており、それだけにあえて入れることが怖かったとも考えられる。入れると大変なイッシュェー（問題）になる。その潮流が出て来た時には、文革派にとつては非常な危機にもなる。

桑原 一つの国家的な課題として、「四つの現代化」というのは当然出て来る、これをめぐって直ぐ論争が始まる。その論争は、当然権力闘争に結び付かない政策論争はあり得ない。やはりこれからの問題の重点は、いろいろ指摘したポイント以外に、「四つの現代化」をめぐる内部抗争が出て来るということとは確実視していると思うのです。

対ソ関係は変化するか

中嶋 最後に、対外関係の方に移りたいと思います。そこで、中ソ関係がどうなるかということが一番注目すべき問題であることは間違いないし、そのことは同時に米中関係がどうなるかということですね。

毛沢東の死に対して、ソ連は一応弔電を送り、またマズロフ、グロムイコ両政治局員がモスクワの中国大使館を訪れている。これに対して中国側は、当然のことながらソ連からの

弔電を送り返している。中国にとって、当面恐れることは、

少しでも毛沢東の教えからそむいて、「ソ連修正主義と妥協する」という後ろ指を指されないことです。ですから、中国にとって対ソ関係は非常に慎重にならざるを得ない。それに對してソ連はいろんなゆさぶりをかけてくるでしょう。ソ連にとつて毛沢東の死は、新しい出発点ともなるわけで、何回中国が拒否しても、いろいろな形でゆさぶりをかける。その第一歩が、すでに現われている気がする。にもかかわらず、ソ連の側は手がかりがない。たとえばフルシチョフが失脚した時、周恩来が直ぐモスクワに飛んで、ブレジネフやコスイギンと話し合った。その結果、期待を裏切られてまた中ソ関係は悪くなったけれど、今のソ連では毛沢東が死んだからといって、だれか北京に飛んで行って、中国首脳と話すようなきっかけがない。

そこで、ソ連にとつて一つの大きな手がかりは、何といつても中国の国内が政治的に不安定化し、今後流動するということだと思ふ。当面、その中で、私は軍の動向などをソ連はかなり注目するのではないかと思います。そういうところで、ここ一年ぐらゐの間にソ連はいろいろな政策を展開するんではないか。

仮に、中ソ関係がかつてないような中ソの「ルネッサンス」——もちろんこういふことは絶対にあり得ないし、ソ連もそういふお目出たいことは考えていないが——という形で復活

していくことになる、アメリカの世界政策なり、アジア政策の基本的な枠組みが崩れることになる。これはアメリカにとつては最悪の悪夢となる。そこで、アメリカとしては、何としてでも中ソ関係の改善を阻止する方向に動く。つまりアメリカからの中国に対するいくつかのアプローチがさらに進むだろうと思います。それは恐らく、毛沢東以後の内政が混乱しない方向に、アメリカはサポートするだろう。混乱することは、アメリカにとつても結局ソ連の介入を招くかもしれないという不安がありますから。

同時に、その場合単に精神的なサポートや外交上のサポートのみならず、ひょっとするとシュレジンジャーが言っていることにも現われているように、ある意味での純軍事的な支援、軍事情報の提供ということまでするかもしれない。

桑原 日本でもアメリカでも、中国の穏健化を期待しているわけですが、中ソ間が握手する事態は、考えられる範囲内で言うと、やはり実権派がリーダーシップを握った時、より多くその可能性が出てくると思う。

ですからアメリカ、あるいは日本の国家的な利益から考えると、中ソ対立が続くことが望ましいわけです。だとすると文革派がリーダーシップをとる方が、今のような対立状態を続ける可能性が非常に大きい。そこで、中国の穏健化を望みながら、他方で中ソ対立を続けさせるといふ一見矛盾したことになる。

(九月十八日収録)